

比較住宅政策研究会 議事録

日時：2003年 5月14日(水) 午後6時30分～8時30分

テーマ：スウェーデンのまちづくりと住まいづくり

報告者：首藤 亮一氏(まちづくり研究所)

会場：国際建設技術協会 6階会議室

出席者：海老塚、矢野、大熊、山下、若林、横尾、松岡、松本、松岡、吉田、宮田、吉村、家内、横山、黒沢、古里、井澤、青木、佐々波、高橋、馬渡、北村 (計22人)

I. 報告

- ・スウェーデンの都市計画の概要、機能主義の影響
- ・コレクティブハウジングの紹介、実例

II. 質疑応答

コレクティブハウジングでは資産の形態は共有資産が中心。賃貸もあればコーポラティブもある。区分所有はない。賃貸の方が、共同作業の義務などを契約で確認できるため、うまくいく場合が多い。

コレクティブハウジングの大家は公社、市である場合が多い。

住居者の年齢構成はミックスの場合が多いが、中には40歳以上の高齢者に絞ったものもある。子供の叫び声などを高齢者が嫌うためである。基本的には共同作業ができれば入居できるが、定時に帰宅できるホワイトカラー層が多い。

スウェーデン全国で60住宅団地ぐらい。住宅全体の5%にも満たないぐらい。住宅の選択肢の1つとして定着してきている。大家族の融合という印象。

共同作業の費用、補助金等はでているのか。

家賃扶助の政策がある。共益費用は払う。共同夕食の食費は一食500～600円(高めに見ても)ぐらいと安い。日本食と異なり、皿数が少ないなどの文化の違いもある。また、仕事と共同作業の両立はスウェーデンの企業ではできているが、日本では残業が多いなど難しいだろう。

日本でも老人同士のコハウジングを導入できないか。公団で以前2つやったことがあるが、費用が高くかかり失敗した。建物を用意して、民間に任せてしまう傾向にある。

(文責：矢野麻美子)

スウェーデンのまちづくりと住まいづくり

1. スウェーデンの都市計画の流れ

1) 1850年代：オーストリア人建築家カミロ・ジッテの影響

- 直線的なデザインへの批判
- 多様なパタンの必要性
- 美的感覚の強調と地形の尊重

彼の影響を受けたスウェーデン人建築家パール・ハルマン

この影響を受けてスウェーデンの第2の都市ヨーテボリでジッテの理論に基づいて都市計画に従事した後、1894年よりストックホルム市の都市計画に従事し始める。1923年に市都市計画の責任者に就任する。

ハルマンの手法

- 伝統的格子状パターンに代えて、地形を取り入れた制限の緩やかなパターンを用いて建築により美的景観をつくりだすことに重きを置いている。
- 権威ある建物のデザインは画一性と威厳が与えられている。
- この都市計画は1920年代の住宅建設の基礎となる。

2) 1900年代「田園都市（ガーデンシティ）」

- 英国のエベネツァー・ハワード1898年に著した「明日（の田園都市）」に基づく都市論
- 18世紀から19世紀初頭のヨーロッパの大都市は過密と不衛生が問題となっており、その解決策として、大都市の周辺に低密度の住宅地が主体の衛星都市を形成し、都市と田園の良い結びつきを提唱。
- この考え方はスウェーデンには1910年代に輸入され、特にストックホルムでは路面電車網の郊外への拡張に伴い、郊外での家族用住宅建設が盛んになり、この手法が採用されていった。
- ストックホルムで特徴的であったことは経済的に豊かでない人々に郊外住宅を供給するために自力建設の仕組みを組織し、各家族は住宅を自力で建設した。スウェーデンの田園都市はこのように形成されていった。

3) 近隣住区理論

- 米国の社会学者アーサー・ペリが1929年に発表した社会交流を目指した住区計画論
- 小学校、近隣公園と他のサービス施設と住宅地から構成される。
- この理論は終戦後の英国で数多く実践例をつくる。
- スウェーデンでは（スウェーデンは参加していないが）第二次世界大戦の影響で停滞していた住宅建設が終戦後活発化し、大都市における市街地の構造化が求められた。
- 1940年代スウェーデンでは英国の実践例を参考に大都市郊外に近隣住区を形成（開発）し、地区で近隣交流を図るコミュニティ施設を備えた住宅地が形成された。
- スウェーデンでは近隣住区のセンター部分は計画のとおり機能しなかった。原因は大都市の中心市街地から各近隣住区が離れていなかったため住民がストックホルム中心街をセンターとして利用したためである。
- したがって1950年代以降は適用せず。

2. 機能主義の影響と住まいづくり

1) 機能主義の影響と住まいづくり

1920年代近代建築黎明期 バウハウス（独）コルビュジエ（仏）

近代建築の特徴

- コンクリートの壁
- 大きなガラス窓（開口部）
- 鉄でつくられた窓枠や構造体
- 装飾の排された抽象的形態
- 工業製品による構成

博覧会と住宅政策

- 1920年代後半相次いで近代建築による博覧会がフランスではパリで、ドイツではシュテットガルトで開催され、ヨーロッパに大きな影響を与える。これを視察したスウェーデン人建築家ウノ・オーレンはこの近代建築様式「funktionalistisk（機能的）」と形容し、スウェーデンでは機能主義建築と呼ばれるようになる。
- スウェーデンでは機能主義建築は住宅政策と結びついて支持される。
- 背景として1930年の社会民主党の政権担当による福祉政策を基盤とした住宅政策・住宅計画が科学的な理論に基づいて計画・建設される機能主義建築を支持する。

機能主義建築の具体的な支持理由

- 大都市部の住宅不足
- 合理的な住宅計画と住宅供給の必要性
- 住宅生産の合理化
- 生活の合理化と人間工学に基づく設計

機能主義への真剣な取組み

- 同時期、住宅計画を合理的に行うために台所における行動実験調査開始
- 住戸のプロトタイプを数多くつくり合理的住戸計画を追求（必要最小限スペースの追求）
- 純粹形態の機能主義建築でなく地元の材料や構法を採用し、質の高い居住環境を形成

3. 機能主義の本格化とコレクティブハウジングの誕生

1) 初期コレクティブハウスの建設目的

- 最初のコレクティブハウスは中産階級の生活の合理化
- コスト節約
- 「collective service」という家事労働の集約化
- 各住戸のスペースの節約

2) 機能主義コレクティブハウス

機能主義を支持する建築家達はこの「家事労働の集約」に目を留め、論理的な根拠として捉える。

誕生の経緯

- 機能主義コレクティブハウスの開拓者建築家スヴェン・マルケリウスは社会改革家アルヴァ・ミルダールの支援を受けて実現「John Ericsson Gatan6」

時代の要請

- 工業化の発達により労働市場が女性の労働力を必要
- 女性が家事と賃金労働を両立させることが重要

狙い

- 機能主義建築家は家事労働を減らすために住棟内で家事を集約し、合理化
- 必要最小限の空間計画を実現
- 居住対象者は労働者階級

現実

- 労働者の関心は得られず、居住者の多くは革新的な知識階層もしくは（少し遅れて）片親家族
- 新しい住まい方は特権階級の住まい方という偏見
- 多くの婦人組織が支持、男女平等を促進する施設としてみなされ、1939年に職業婦人組織のためのコレクティブハウスが実現(コレクティブハウスYK)

3) 機能主義コレクティブハウジングの発展

建設事業者オレ・エンクヴィスト

- 1940年代と1950年代に多くのコレクティブハウジングの建設を推進
- ##### セルフサービス型コレクティブハウジングの特徴
- 住宅内の近隣交流より家事労働の合理化と充実したサービスの供給を重要視
 - レストランや洗濯屋、そして育児施設など生活支援施設を雇われたスタッフによって住宅内で運営
 - 中産階級の住まい(サービスのコスト大)
 - 大規模な世帯数と塔状住棟

4. サービス型コレクティブハウジングの出現

1) ヘッセルビーファミリーホテル

近代主義建築の改良型

- デザインは基本的に機能主義建築
- 材料、色、形に多様性を持たせる
- 各アパートは最小限スペースではなく、多様な住戸タイプ

居住者は上流階級

- 居住者はレストランに行く際、着飾った

多様なサービス

- レストランや清掃サービスのみならず、美容院や日常生活品を扱う店舗まで備えていた

サービスの廃止

- 1969年エンクヴィスト死後、コスト削減のため、サービス廃止の決定
- 居住者は反対、しかし実施
- サービス施設の完全閉鎖
- 活動的な居住者は管理会社から厨房の鍵の借用に成功

共同夕食の開始

- 厨房を使用し給食活動開始、共同夕食も開始
- 居住者自身による運営
- 共同夕食は生活に楽しみを与え、時間の節約を可能にすると捉えられる

2) セルフサービス型コレクティブハウジングの登場

ヘッセルビーファミリーホテルの影響

- 共同夕食はセルフサービス型のプロトタイプ
- 報道や、現地見学などで生活スタイルが広まる

女性グループの小規模共同生活型コレクティブハウジングの提案

- 食事づくりや子育ては女性の文化の一部で他人(サービス機関)に任せ

- 他人と協働することで積極的な生活上の楽しみとなる
- 住戸は20から50戸で協働作業に適する戸数
- 共同作業は自分たちの手で
- 多様な居住者層

居住者自身の決定権の尊重

セルフサービス型コレクティブハウジングの誕生

- 共同夕食が中心の生活
- 社交的生活の重視
- 子どもの環境の重視
- 多様な共用施設と居住者による管理

3) 新しいコミュニティのかたち

共有の資産、資源から各個人が受益

個人の利益追及と共益の追求が一致

資産の、資源の増大・維持のために各個人が協力して維持・管理

